

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第24回 日本とウガンダの架け橋となっているウガンダ人ーBMKの巻

本年7月の異常気象により被災された日本の方々に深くお見舞い申し上げます。この7月の豪雨により、各地で洪水、土石流、地滑りにより多くの方が命を亡くされました。豪雨が収まり、生活再建を立ち上げた矢先の猛暑。しかもこの猛暑のため、豪雨の被災地では思うように作業が進まず往生し、国内数か所では40℃を超える酷暑を観測・熱波が日本を覆い尽くしたため、多くの方が熱中症で病院に搬送されたと聞いております。そして月末には台風12号が異例の経路で本土を襲い、日本列島を中央部から西日本にかけて横断していきました。当地でも日本の自然災害が新聞報道されました。被害に遭われたり、健康を損なわれた方々に改めて心よりお見舞い申し上げます。

今回は、「日本とウガンダの架け橋となって頑張っているウガンダ人」パート2としてBMK氏を紹介します。BMKは、Bulaimu Muwanga Kibirige（ブライム・ムワンガ・キビリゲ）が本名ですが、BMKと言ってウガンダで知らない人は一握りでしょう。彼はカンパラ市内に大きなホテル・アフリカーナを所有・経営し、ウガンダ国内のみならず東アフリカ地域において建機・クレーンの輸入販売しているウガンダきっての大金持ちの一人です。今日のBMK帝国を創り上げるに至った経緯には日本と切っても切れない関係があります。そのあたりを中心にBMKの人となり皆さんに知ってもらいたいと思います。



日本で作業中の若きBMK



会長デスクに座るBMK

BMKは、1953年10月カンパラの西120kmほどにあるマサカ県で、二男八女の長男として生まれました。小学校卒業後は中等教育に進まず、14歳の時にはもう父上がマサカ市内で経営していた小さな宿を手伝い、同じく父上が営む商売の手伝いを始めました。20歳の時には既に独立してケニアからいろいろな消費物資の輸入業を始めました。

このことは当時のアミン大統領が1972年にインド人を国外追放したと深く関係しています。1962年のウガンダ独立以前から多くのインド人が国内の商業に従事していて事実上ウガンダの経済を掌握していました。アミン大統領はウガンダ人がこれらのインド人に搾取されているとしてインド人の国外通報を命じたのでした。しかし、インド人追放後ウガンダの商店に彼らが扱っていた品物が揃わなくなってしまったのです。それを間近に見たBMKは素早く色々なところから生活に必要な品物を仕入れ販売を開始したということです。そして順調に商売の幅を広げ、1976年には香港やバンコクから衣料品や電化製品輸入を取扱い始めました。このようにアジアに進出していくうちに、日本の在ウガンダ大使館の外交官と話す機会を持ち中古車販売の話が出てきたのです。

いよいよ日本との関係が出てきましたね。そして早くも1982年、BMKは日本の中古車をウガンダへ輸入する事業を開始しました。この時に彼のパートナーとなってくれたのが愛知県安城市にある榊協栄という中古車ディーラーでした。なんと驚いたことに、協栄の社長はBMKを信用し購入資金を用立てくれて中古車を販売してくれました。更に、販売から4年後1986年には日本の中古車部品も扱うようになり、中古車及び部品を中心に扱うBMKウガンダ社を立ち上げました。このように日本から中古車を輸入して販売する先駆者となり、財を成したことは申し上げるまでもありません。しかしながらそれに満足することなく、1987年には日本から中古バイクの輸入にも手を広げました。カンパラ通信第21回で、ボダボダと呼ばれるバイク・タクシードライバーのことを書きましたが、このように日本からオートバイを輸入しこのビジネスを創始した本人こそBMKなのです。輸入先も当初のウガンダだけでなく、ケニアやタンザニアという他の東アフリカ諸国にも会社を興して商売を地理的にも拡大しました。1992年にBMKタンザニア社、1994年にBMKケニア社、96年にはBMKザンビア社と次々に立ち上げ、今世紀に入った2004年にはBMKルワンダ社を興しています。干支一回りの中に4か所の海外展開をした結果、東アフリカの交通絵図が大きく変化したといっても過言ではないでしょう。現在のウガンダを含む東アフリカ地域で目の当たりにする日本の中古車による混雑ぶりはひとえにBMKの商才に帰するといってもよいのではないのでしょうか。BMKグループは、今では中古乗用車からは手を引いて（ザンビアを除く。）、クレーンや建設用機械といった中古建機の輸入に重点を置いています。中古建機の調達は日本でのオークションで行っているのですが、中古クレーンについては、愛知県の西尾市の西尾重機と取引しているとのことです。



ホテル・アフリカーナ外観



大統領による開館を示す玄関プレート

またBMKは父上が経営していたホテル業の遺志を継ぐべく、中古自動車等販売で得た資産を元手に、現在のホテル・アフリカーナが位置するカンパラ中心部のコロロの丘のふもとの土地を1987年に購入します。そして、40室の小さなホテルとしてオープンしたのが1997年7月、開館式ではムセベニ大統領がテープカットを行いました。昨年は創業20年の記念の年となり、今では、233客室と30室のサービス・アパートメントに成長しました。3,500人も収容できる大会議ホールを併設し、大統領も出席する各種の重要な会議やパーティーに使われています。ホテル操業20周年を記念して昨年ホテルに隣接しBMKハウスというオフィス・ビルディングが完成し、オフィスとして企業へリースしています。因みにこのビルの最上階となる12階にBMK会長室があります。会長室からの景色はカンパラ市内を四方見渡すことができ最高です。BMKは、この会長室から景色を眺めながら自らのビジネスの展望を描いているのではないかと想像しました。カンパラ市内では別の3地区にサービス・アパートメントを経営し、この他モロトというウガンダ東部の町にも55室のホテルを建設中で、ザンビアの首都ルサカにもホテル・アフリカーナの建設計画があるといえます。

BMK曰く、これまで自分が投資した総額は5千万ドル以上に上ると豪語していますが、彼はビジネスだけに精を出しているわけではありません。彼の篤志家という紳士的な側面の紹介も忘れるわけにはゆきません。ウガンダ鎌状赤血球症協会の会長を務めており、この難病についての公衆啓蒙活動を推進し、治療薬の開発も支援しています。このような貢献が認められて、BMKに対して米国のキリスト教系国際大学から名誉哲学博士号が授与されています。

とにかくBMKは、働き者です。自分でもこれといった趣味はなく、とにかく仕事するのが趣味だと述べています。そして、強い意志さえあれば全てが可能だと言い切ります。BMKのモットーはと尋ねてみましたら「信頼を得ながら真面目に人間関係を構築するこ

と」と言います。「重要なことは、人を裏切らないこと。」だとも言っていました。そして、BMKが父上から教わった「ビジネスはあなたのものだが、ビジネスで稼いだお金はビジネスのものであって、あなたに帰属するものではない。」という言葉大切にしています。この辺りが日本人と商売をする上で波長がピッタリ合ったのではないかと想像しますし、協栄の社長さんが彼を信用するに至った理由かもしれません。



ホテル・アフリカーナ中庭より



日本の友人と寛ぐBMK

BMKは、先ほど名前を挙げた協栄や西尾重機の社長さんとは亡くなるまで交友を続け、今はその後を継いだ若い社長との間で変わりなくお付き合いを続けているそうです。そのため、今でも年に1回日本を訪問しているとのこと。将に「信頼を得ながら真面目に人間関係を構築すること」のモットーで彼の行動は一貫しています。BMKの挑戦は、日本との関係を大事にしながら、「人を裏切らない」と言う彼の信念を貫き通しながらまだまだ続いていきそうです。



会長室で筆者とツーショットのBMK

(以上)